

きつねをおがんだ人たち

小川未明

青空文庫

むら 村に、おいなりさまの小さい社がありました。まずこの話からしなければなりません。
 むかしひとり 昔、一人の武士が、殿さまのお使いで、旅へ出かけました。思いのほか日数がかかり、
 よう 用がすんで、帰途につきましたが、いいつけられた日までに、もどれそうもありませんで
 した。そのうち、あいにく雪がふりだしました。北国の冬の天気ほど、あてにならぬも
 のはありません。たちまち雪はつもつて、道をふさぎました。

ある日の晩がた、ようやく武士は湖水のあるところまで、たどりつきました。おりから
 ゆき 雪はやんで、西の山のはしが、明るく黄色にそまり、明日は天気がよくそうです。そして、
 ゆて 行く手の村々は、白々とした雪の広野の中に、黒くかすんで見えました。

「ああ、この湖水がわたれるなら、早く帰れるだろうに。」と、湖水の方をながめて、た
 め息をつきました。

このとき、一ぴきのけものがどこから飛びだして、雪をけたてて、湖水を横ぎり、た
 ちまち姿を消してしまいました。

「や、いまのは、たしかにきつねであった。きつねが通ると、水は凍って、人も渡れると
 いう。神さまがあわれんで、助けてくださるといってお告げであろうか。」と、武士は思い、

その夜はここで明かしました。

翌朝見ると、はたして湖水の面は、鏡のごとく光つて、かたく張りつめた氷は、武士をやすやすと、むこうの岸まで、渡らせてくれたのでした。

この、いなりの社は、武士が、お札に建てたものだといいつたえられています。

話はべつに、ある日、町の病院で、貧しげなふうをした母親と少年の二人が、待合室の片すみで、ちぢこまって、泣いていました。ちやうど、こちらには、ござつぱりとしたようすの母子が、すわっていました。子供はまだ小さく、母のほうはどことなく情けぶかそうに見えました。すると、彼女は立ちあがって、

「どうなさったのでございますか。」と、少年に気づいて、たずねました。あわれな少年の母親は、

「この子が、このあいだから、手が痛いといっていますので、今日きて見てもらいますと、もうておくれになつていたので、すぐに片方の腕を切りとつてしまわなければ、命がないとおっしゃいます。どうしたらいいものか、迷つていますのです。」と、答えました。

そのとき、子供の母は、持ち合わせの金を紙につつんで、おみまいのつもりで、なにかにつかつてやつてくれとやつたのでありますが、子供も心をうたれて、気の毒な少年

の顔をじつと見まもつていました。

その子供が、中学へ上がるころのこと、道を歩いていると、荷車を引く、強そうな若者と出あいました。ふと顔をあわせると、いつか病院で、腕を切らなければ死ぬといわれた少年でした。若者もおどろいて、頭を下げ、

「いつぞやは、ありがとうございました。その後、おいなりさまに願をかけますと、うみが出まして、いまではこうして働けるようになりました。」と、いいました。

これを聞くと、やはり神はあるのだと、深く感ぜずにいられませんでした。これまで書いたのは、これから、私がこの少年の将来を語るに必要な、まえがきのようなものであります。

やがて、少年は学校を出て成人すると、にぎやかな都会にあこがれ、そこで暮らすようになりました。またぜいたくがしたくなり、千金を夢みて株などへ手を出すようになる、さすがに自分の力ばかりを信じられず、ひたすら神さまを頼ろうとするようになりました。

彼は、毎朝起きたときと、夜ねむるときには、かならずふるさとの方をむいて、頭を下げ、あのさびしい森の中の社をおがんだのです。そして、風の吹く日は、ゴウゴウと木

の枝がさわぐありさまを想像し、雨のふる日は、おまいりするものもない、ぬれた社殿の屋根を目にえがきながら、どうぞ私を助けたまえとおがみしました。

それにもかかわらず、国が戦争にやぶれてからは、景気の変動もはげしく、とうとう彼はどん底へつきおとされました。それでも、まだ神のご利益があるものと信じて、村の知人をたよって帰りましたが、もはやだれもふりむくものはなかったのです。その日を食うに困り、星晴れのしたある夜、おいなりさまの境内で自殺をはかりました。幸か不幸か、なわをかけた枝が折れて、彼は地上へ落ち頭を打つとそのまま気が遠くなってしまうました。

しばらくすると、だれかきて側に立ったように感じました。うす明かりで見ると、白いひげのはえた、からだつきのがつちりした老人でした。かすかながらも、記憶があります。そうだ、用水池を造って、村を早魃から救った、日ごろみんなの尊敬している人でした。老人はいいました。

「おまえは、子供の時分、なかなか正直な子供だったが、どうして、こんな人間になつたのか、それにはわけがあるろう。」

こう聞かれると、彼は、おいなりさまの、いろいろのご利益を説いて、自分もしあわせ

にしてもらいたいためだといいました。そして、こうなったのは、まだ信仰しんこうが足りたないからでしょうと、答こたえました。

「ほか者ものめ、たとえ神かみさまがいらしても、ひとのためを思おもわぬ欲よく深ふかや、ひきよう者ものに、なんで味方みかたをなさるものか。鳥とりや、けものを見るみがいい。いつもいきいきとして、自由じゆうにたのしんでいる。神かみさまからもらった、手てと足あしにしかたよらないからだ。気力きりよくのない人に間まだけが手てと足あしを持ちもちながら、働はたらくのを忘わすれて、はじ知らずにも、頭あたまばかり下さげて、おめぐみにあずかろうとする。こんなこじきは、鳥とりや、けもの世界せかいにいない。」

老人ろうじんに、くわでこづかれたと思おもつて彼かれは、気きがつき、目めがさめました。考かんがえると、この老人ろうじんは、とつくの前まえに、あの世よへいった人ひとでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「週刊家庭朝日」

1950（昭和25）年1月

※表題は底本では、「きつねをおがんだ人《ひと》たち」となっています。

※初出時の表題は「狐をおがんだ人たち」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

きつねをおがんだ人たち

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>